

遊水地で開発適さず アユモドキ広く生息

スタジアム計画課題議論

京都府の球技専用スタジアムの整備など、J・R亀岡駅北地区の開発を考えるシンポジウムが30日、亀岡市余部町のガレリアかめおかであった。専門家3人が、スタジアム計画などを巡る経過を振り返り、課題を探った。治水対策に詳しい今本博健京都大名誉教授は、駅北について



J・R亀岡駅北地区の開発を巡るさまざまな問題点について考えたシンポジウム(亀岡市余部町・ガレリアかめおか)

亀岡 専門家ら招きシンポ

「開発に適さない遊水地。氾濫域を埋め立てると浸水水位が上がり、洪水調節機能も低下させる」と懸念し、「スタジアムは防災拠点として活用できない。現実的な計画を採るべき」と批判した。

世界自然保護基金(WWF)ジャパンの草刈秀紀事務局長付は、アユモドキ保全の観点から「野生生物の生息環境はもっと広く見積もる必要がある」と主張、行政は地元住民らの意見を聞く場を増やすべきと指摘した。

また、スタジアム建設予定地や駅北を巡り、京都地裁で係争中の二つの訴訟に関し、弁護団の高木野衣弁護士が、災害リスク、法律的観点から見た市の計画の妥当性など争点を解説した。

亀岡駅北開発・スタジアム関連訴訟を支える会が主催し、市民ら160人が参加した。

(森大樹)